■短期連載＊没後50年大宅壮一をよむ■

最終回『編集復刻版 サンデー時評』全二巻

阪本博志

本連載第一回目において、冷戦下で特定のイデオロギーに属しないことを標榜する、大宅壮一の戦後の立場について述べられた「「無思想人」宣言」を紹介した。

第二回目において、上記の立場とつながる「あらゆる対象から距離をおく批評的処世術」（半藤一利氏）、造語・比喩の駆使、海外体験の紹介という、大宅の著作物が戦後広く読まれた要因を指摘した。

第三回目において、現在の大宅壮一文庫の基盤となった二〇万冊の古書を大宅が収集し、それをデータベースとして活動を展開したことを概観した。

最終回の今回は、大宅の最新の著書として、『編集復刻版 サンデー時評』全二巻（阪本博志編・解題、六花出版、二〇二〇年）をとりあげる。

本書は、大宅の晩年の二大連載のひとつである「サンデー時評」全二四四回（『サンデー毎日』一九六五年一〇月一七日号から一九七〇年一一月一日号）を原寸で復刻したものである。二大連載のもうひとつは、『週刊文春』の「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」である（一九六五年一月四日号から一九七〇年一一月三〇日号）。最晩年の五年間に大宅がコンスタントに筆をとり連載していたものが、この「サンデー時評」である。

「サンデー時評」のこれまでの単行本化としては、『大宅壮一全集 第八巻』『大宅壮一全集 第九巻』（いずれも蒼洋社、一九八〇年）に九五本ずつ、計一九〇回分が収録されている。したがって、完全なかたちでの刊行は、本書が初めてである。

「サンデー時評」はおれの遺言

大宅の弟子・大隈秀夫氏によると、大宅が「あの時評はおれの遺言みたいなものだからな」と同氏に言ったという（『マスコミ帝王 裸の大宅壮一』三省堂、一九九六年）。そうした「サンデー時評」には、冒頭で確認したすべての要素を見出すことができる。

造語としてはたとえば「昭和戦国」ということばが使われている。「〝元禄〟オブラートの中の〝戦国〟」と題された第一七八回（一九六九年五月一一日号）は、次のように始まる。「今日の日本は、〝昭和元禄〟と〝昭和戦国〟の二つの時代が仲よく共存し同居しているともいえる」。

「昭和戦国」にあたる具体的な事柄として、国外ではベトナム戦争・文化大革命・公民権運動・「プラハの春」が、国内では美濃部亮吉ら革新首長の登場・全共闘運動が挙げられる。

そして「昭和元禄」「昭和戦国」の時代のなかで「情報化社会」への流れが進んでいることも、「サンデー時評」に綴られている。

これらを社会的背景とした「サンデー時評」では、政治・社会・国際・文化ほか広範な領域の事象が俎上に載せられている。このことは、「主要人名索引」に七〇〇名を超える人物が挙がっていることからも窺えよう。

また、対象を扱うにあたっては、社会評論・人物評論・ルポルタージュほか多様な手法が用いられている。

鶴見俊輔は、一九五九年の時点で次のように述べている。「五十年たってからの学者たちは、昭和時代を研究するのに今日の学者の学問的評論でなく大宅のエッセイを利用するだろうと思う」（『後期新人会員　林房雄・大宅壮一』思想の科学研究会編『改訂増補 共同研究　転向　上』、平凡社、一九七八年）。

鶴見のことばを踏まえると、「サンデー時評」をはじめ、大宅の著作物にはまだまだ活用の余地が残されていよう。

さらには、その作品が書かれた当時を知ることのみならず、それを生み出した大宅という人物、そうした大宅に大衆がリードされていた当時の社会そのものを考えるうえでも、「サンデー時評」は重要でかつまとまった文献だといえる。

以上、今回の連載では、現在新本で入手可能な大宅の著書を紹介した。とりわけ若い人たちがこれらの書物をひもとく際の参考となれば幸いである。（さかもと・ひろし＝宮崎公立大学人文学部准教授・社会学・メディア史・出版文化論）

★おおや・そういち（一九〇〇～一九七〇）＝ジャーナリスト・評論家。一九五〇年代から一九六〇年代にかけて、新聞・雑誌・ラジオ・テレビを横断して活躍。「一億総白痴化」「くちコミ」等の造語で知られる。

『編集復刻版 サンデー時評』全2巻
B5判・510頁・40000円
六花出版
978-4-86617-093-0
TEL.03-3293-8787